

土地

パクキョンリ

朴景利

7

鎌田光登 訳

福武書店

土地

パクキョウリ

朴景利 ⑦

鎌田光登 訳

福武書店

土地

⑦

一九八六年三月五日 第一刷印刷
一九八六年三月一日 第一刷発行
定價 一一〇〇円

著者 朴景利

訳者 鎌田光登

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区麹町六十六 一〇二

電話(〇三)二三〇一―二三二

印刷・製本 大日本印刷株式会社

© PARK KYUNG RI 1983

シリーズコード ISBN4-8288-2041-8

土地7コード ISBN4-8288-2190-2C0093

落・乱丁本はお取替え致しませ

土地——目次

第二篇 終末の発芽〈承前〉

30章	針仕事の話	8
31章	なぜ産んだのか	26
32章	倭兵来たる	45
33章	西姫の怒り	61
34章	真夜中の倉庫破り	84
35章	安山宅の義母の死	103
36章	漢福、母の墓参に	122

37章	金訓長の養子	146
38章	趙俊九の長口舌	166
39章	日露戦争始まる	188
40章	趙俊九ソウルへ	208
41章	斗満、ソウルに行く	225
42章	月仙の寺詣り	248

装丁 菊地信義
カバー絵提供 | 韓国文化院

土地

7

第三篇 終末と発芽（承前）

30章 針仕事の話

つぎはぎだらけの、着付けの曲がった刺し縫いの上衣チヨボリに腹巻をまきつけたマクタリの母、ヤムの母は腕組みをして石垣によりかかって話をしていた。陽光のあたる石垣の下には雑草の芽が現われていた。

「人間が生きる宿命バムオヤがどうなっているのか、分からないわな。つぎの悪い人間はひっくり返って、鼻がつぶれてしまうのに、つぎのいい者はひっくり返っても鼻に金の指環がはまっているけんねえ」

チマの裾を巻き上げて、絶えず出てくる鼻水ハナムクをかむために、マクタリの母は話をやめた。

「そんなことはみな、運命で決まっとるんだわな」

ヤムの母は関心もなく、いった。陽光がちょうど心地よく当たっている模様だ。

「任イミの母、あいつがうまくやっているのを見ると、乞食の中でも上等の乞食の中に入ったわけやで、この村にやってきたのが昨日か一昨日のようなのに、あいつの運命がそんなによくならない、いったい誰が知っていたんやろ」

「またねたみ心が頭をもたげてきたようだなあ」

「ねたみ？ そりやもうねたみ心も出るわな。どうしてねたみが出ないとね？ 打ち出の小槌の

ような息子」

「昨年の秋のことだろうが、よくもまあ、幸運が重なったものじゃわい」

「ふん、男の子だけ産んだことがかい？」

「江清宅がちょうどうまい時期に死んだ、そのことじゃろうが」

「そのこともそうだが、そんな幸運がどこで、そんなにやすやすと引っ張って来れたのやろうか？」

「だから、わしがゆうとるやろうが、それも積み重なって今じゃ神仏が現われるほどじゃ。いつもゆうとることじゃあないか」

「それでも、だからさあ、わしがいいたいのはそんなことじゃあないんだよ。ついてる奴は引っくり返っても金指環さ」

「春の耕しに行きなさるんかい」

マクタリの母の話に嫌気がさしたヤムの母は、牛の背に鋤を載せて畦道を行く永八目がけて声をかけた。

「ああ」

「早くから精が出るねえ」

「早くから仕事をしてこそ、ほかの者も牛を使えるんじやろうが」

「そうだねえ」

永八が過ぎて行つた。マクタリの母は再び話を始めた。

「もと罪人の妻が、それだけでも世をはばかるべきなのに、近付いてくる男をみんな自分のものにして、そのうえ白丁（賤民）の男まで」

「そりゃ、誰かが見たことかい」

「見るも何も、分かりきつたことじゃあないの。火がない煙突に煙が出るかい。あんな雑巾のような女子が、丸め込まれる男のほうも、ちよつとやそつとの男なのかい？ だからさあ、亭主が生きていた時から、あの女は李書房に尻尾を振って色気をふりまいていたけれど、あ、ちよつと、運命をあんなに改めた方法は」

「運命をうまく改めたもんやね。人柄がよいからだろうかね。みな同じ寡婦の身の上なのに、マクタリのおつ母さん、お前さんやヨンシムの母も同じだもんね」

「そんなこといいなさんな。同じく寡婦の身の上だって？ どうして同じ寡婦の身の上よ。あの雑巾のような女とおらを比べるのはよしてよ。おらはおら、おらは潔白そのもののようにでさ」

といつたが、潔白そのもののようにだといつた時の表情は、自信がないようにみえた。

「それそれ、お前さんのことばは当たっているわさ。お前さんが死んだら、烈女碑が立つわな」
そのことばに、マクタリの母は口を閉じてしまった。

「どんなに運命をうまく改めても、女子は一人の家長の下で頭の毛が白くなればなるほど、運命に従つて生きてこそ、それでこそ人間の仲間に入るのじゃ。誰々は歳を取つても、この村じゃあ

斗満トマンんとこの利平イレイくらい運命のよい人はいないとね」

「そんなこといって、どうなるの」

「徐書房ソツブツとこの婆さんが一番幸せだといわれてきたけど、昨年秋に虎のようだった息子と孫を亡くしたけんねえ。家ごとトに葬式を出したのに、斗満トマンとこの利平の家は、犬の子一匹喪モトわなかつたんだから」

「そ、それだから、わしが何とイったかね。うまくやアつてる奴は引ヒっくり返カつても金指環キサザをはめるんだよねえ。任イの母、あの女メも」

マクタリの母はそういって、ヤムの母の顔色をちらりと窺ウつた。

「昨日の夕方ごろ会アつたんだけど、あ、わしのいうこと、ちょっと聞いてちょうだいよ。あの女メが崔参判家ソエサンパン、あすこから出て来たわなあ」

「崔参判家から？ いったいあすこにニなんで行イつたんかいのう」

「だからさあ。わしがいいたいのは、まさにそのことじゃあないか。わしもただごとではないと思オつて、さっきから話してルんじや。お前マさん人相見ニをするそうじゃが、任イの母がこともあろうに崔参判家で賞カを受けて出てきたらしいんではないか。それにしても、あの女メの奴ヤ、叱ツられてくるなら当たり前なのに、どんな賞かといえバ、針仕事ハをちよトと手伝テつてくれないかということだといッてたわ。そんなことトつてあるかい、ええ、ヤムのおト母さん」

マクタリの母は突然声を低ヒめた。

「お前さん、ちょっと考えてごらん。よく考えてごらん。そしたら、ああそうかどうなずけることがあるはずだよ」

「うなずけるって」

「う、うん、このおばかさん、ちょっと頭を働かしたら？」

「……………」

「ソウル、あの旦那が賞をくれることになったのか、そうでないのか、それでも分からないのかい」

「それで……………」

「任イミの母チルソソが七星の女房だったことを知らないことがあるかい。大奥様が生きておられたら、どうしてあのお邸に足を踏み入れることができたかい。崔参判家でいえることといたら、七星の奴は殺人を共謀した奴で、天下の大逆人ではないか。しかしソウルの、あの旦那にとってはそうでもないわな。これだけいえばはつきりするじゃあないか。それでも合点がいかないのかえ」

「……………」

「みんな口を閉じて、はつきりいわないけれど、崔参判家の暮らしはこのまま続いていくらしいわな。だから、任の母の奴にもそれが分かっているということがあるからんのかというとのよ。そこがどこだと尋ねていく者もそうだし、この問題に足を突っ込むあま女もそうだし、まったくこの世の中で人間が暮らしていく条件が乱れてるわ、乱れてる」

「聞いてみると、そんなことも決して……」

「そんなことも決してではないわな。一万石の暮らしがそうになっていくのには、死んだ七星も秘かに功績があったというわけさ」

「そうだけれども、そんなにやすやすと他人の暮らしが、そんなに沢山の財産が……法つてものがあるはずなのに」

「おい、お前さん」

マクタリの母は、ヤムの母の耳に口をペタリとくつつけた。

「本当にだよ、これからいうことだけは誰にもいっちゃあだめだよ。お前だからいうので、ほかの者が知ったら大騒ぎになるからもう。これだけは、おらだけが知っていることだから。あのせむしの総領息子がいるだろ。ソウルの旦那の息子のことだよ。あの息子と崔参判家のお嬢さんを夫婦にするということじゃ。あの三守^{サムス}がおらにだけ、そういつてくれたんじゃ。このごろ三守の威勢が、人並み以上になってきたのを知ってるかい」

ヤムの母の顔色が変わった。

「そ、そんなことが！」

「強い弱いが動かなければ、どうすることもできないのさ。誰一人口に出している人がいるもんかね。それはそれとして、このことはお前さんの胸の中にだけ収めておいてよ。こんなことを他人にいったら、お前さんか、おらかが災難にあうからなあ」

マクタリの母は、うらやましくて、氣力をふりしぼって中傷をしたが、任の母の境遇は彼女らが考えたようには幸せではなかった。昨夜の夕食時に、崔參判家に呼ばれていった時も、竜は家に居らず、今は夜更けが過ぎているのに、竜は邑内ウツチノに行つたまま戻らなかつた。春の針仕事をすするため、任の母は板の端に出てきて、憂鬱そうに坐っていた。

昨年クニノの秋、悪疫が流行して過ぎていったのち、田畑の穀物はひとりでに熟して実り、冷たい風が秋の取り入れを催促したので、人びとは鎌を握って田んぼに出なければならなかつた。この忙しい季節が過ぎて、りすが餌を貯蔵した穴の中で冬を迎えるように、自分の粗末な家にもついていた時、人びとは初めて家族を喪つた悲しみを身にしみて感じたのであつた。そして災難を避けた誰その家に対する羨望も併せて感じたのである。燕はみな一緒にねらわれたのに、誰かは鉄砲の弾に当たり、誰かは当たらず——というように、誰それは家族のうち一人を喪つたが、わが家では二人喪つたといつて、天を怨み、無事に生き残つた人びとに対して憎悪の矢を放つのであつた。任の母の場合、二人の子供を喪つていなければ、最も烈しい憎悪が集中したのであろうことは間違ひなかつた。

「烏カラスが鵲カササギの巢を奪うように、うごめきながら入り込んできたとな。あの女め、運もいいわい」
そうでなくとも、誹謗中傷の的になつていた彼女だ。だが烏が鵲の巢を奪い取るように、江清宅がいなくなつたあとの地位に入りこんだ任の母の立場は、實際のところ、それほど堂々としたものではなかつた。子供を産んでやつたのに、これ見よがしに振舞うこともできず、竜は秘かに